

ローマ人への手紙9章18-21節 「神に言い返すあなたは何者か」

1A 生まれる前からの選び

1B 不公平という訴え

2B 予知による選び

3B 主権者なる神

2A 主権による選び

1B 憐れみにおいて

2B 頑なにすることにおいて

3A 言い逆らう人々

1B 理由を述べる義務もない主権者

2B 神の気前良さ

3B 陶器師の心

1B 尊い器と普通の器

2B ろくろの上の粘土

本文

ローマ人への手紙 9 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ローマ 8 章まで来ていました。午後礼拝で、9 章を一節ずつ見ていきますが、今朝は 18-21 節から見ていきたいと思えます。「¹⁸ ですから、神は人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままに頑なにされるのです。¹⁹ すると、あなたは私にこう言うでしょう。「それではなぜ、神はなおも人を責められるのですか。だれが神の意図に逆らえるのですか。」²⁰ 人よ。神に言い返すあなたは、いったい何者ですか。造られた者が造った者に「どうして私をこのように造ったのか」と言えるでしょうか。²¹ 陶器師は同じ土のかたまりから、あるものは尊いことに用いる器に、別のものは普通の器に作る権利を持っていないのでしょうか。」

パウロが、これまで福音について語ってきました。「1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」8 章において、大胆にも、どんな被造物も、キリストにある神の愛から私たちを引き離すものはないとまで断言しました。ところが、パウロは、9 章の始まりで、「9:3 私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」とまで言っているのです。どんなものも引き離すことはないと言っているのに、引き離されたいとまで言う、心の痛みが彼にはありました。それは、福音が「ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です」ということなのに、肝心のユダヤ人が、その指導者を中心に、福音に敵対していたことでした。ユダヤ人を救う方として来られた方なのに、彼らが受け入れなかったという悲しみが、パウロにはありました。ヨハネも福音書の冒頭で、こう語りまし

た。「1:11 この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。」

私たちも、自分に一番近い人たちが、最も愛している人たちが福音を拒んでいる姿を見たら、心悲しくなりますね。パウロにとってユダヤ人は同胞であり、兄弟たちです。それに加えて、ユダヤ人は神ご自身が愛し、選ばれ、みことばが与えられた民なのに、その民が彼らの救い主を拒んでいることに対して、強烈な痛みを覚えているのです。

そこでパウロは、この云わば「イスラエル問題」を真正面から取り組みです。その背後には、神の不思議な選びのご計画がありました。神は主権者であられ、また私たちをはるかに超える知識と知恵によって、ご自分の望まれるままに事を行われます。そこで、私たちにとっては、どうしてもしっくりといかない、もどかしい、神のお働きがあるのです。アブラハムを神が呼び出され、彼からご自分の民を造られることを決められましたが、息子イシュマエルがいるのに、敢えて妻サラから生まれるイサクが約束の子であるとされました。そしてイサクから双子が生まれますが、なぜか兄エサウではなく、弟ヤコブを選ばれました。私たちが、当然これだろうと思っていることと、正反対に見えることを神がお考えになっていることが、多々あるのです。「イザ 55:8 わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。」

神の選ばれた、愛するイスラエルがキリストを拒み、キリストを求めていなかった異邦人がかえって信じて救われているという、ねじれが起こっていることに、パウロは、神のご計画があり、選びがあるからだ論じていくのです。その中で浮かびあがってくるのは、私たちの問題です。神が主権者であるのを忘れて、あたかも自分が正しく判断できているばかりに、「このようなことをする神は、不正である。」と言い返しているのです。それに対してパウロは、「²⁰ 人よ。神に言い返すあなたは、いったい何者ですか。造られた者が造った者に「どうして私をこのように造ったのか」と言えるでしょうか。」と言っているのです。私たちが、知りもしないことを知っているかのように訴える問題と、神がすべてをお決めになっている主権者なのだということを知っていきたく思います。

1A 生まれる前からの選び

パウロは、9 章でまず、イスラエル人すべてが、神に救いのために選ばれたわけではないことを論じていきます。現に、イスラエルの父祖である、アブラハム、イサク、ヤコブにおいて、そこにはイサクの兄イシュマエルがいたのに、イスラエル人とはされず、ヤコブの兄エサウがいたのに、イスラエル人とはされていない事実をパウロは述べています。ヤコブとエサウに至っては、良いことも悪いことも何も行ってない生まれる前から、すでにヤコブを選ばれていたことを述べています。「¹¹ その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに、選びによる神のご計画が、¹² 行いによるのではなく、召してくださる方によって進められるために、「兄が弟に仕える」と彼女に告げられました。¹³「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書かれているとおりです。」私たちはすでに、神が私たちの行いではなく、神が愛してくださっていて、一方的に憐れんでおられるから、それで私たちを救ってくださったことを学んできました。そのことが、あまりにも明確に、エサウとヤ

コブのことで起こっていて、母リベカの胎に二人がいる時に、神はすでに、兄が弟に仕えたと宣言しておられたのです。

1B 不公平という訴え

それに対して、「神に不正があるのでしょうか。決してそんなことはありません。」とパウロは論じます(14 節)。「なんで、何の良いことも、悪いことも行っていないのに、勝手に、ヤコブを神は愛して、エサウを憎んでいるのか？」として、神を不正とみなしてしまうのです。私たちは、主権者である神を見上げないで、自分自身が一方的に神に選ばれて、愛されていることを忘れて、横にいる人を見てしまうんですね。この人は、もっと正しそうに見えるから神に選ばれているはずだ、あるいは、あの人は、悪そうに見えるから、神に選ばれていないというように。その勝手な判断を、神に押し付けてしまっているのです。しかし神は、もっぱら恵みによって、愛しておられるから選ばれるのであって、生まれる前から愛し、選ばれているのは、その一方的な愛が如実に表れているに他なりません。

2B 予知による選び

それに、神は、予めすべてのことを知っておられて、それで選ばれています。「8:29a 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。」神は予め、ご自分の祝福を得たいとヤコブが求めることを知っておられました。エサウが、長子の権利をないがしろにすることも知っておられました。ヤコブについて、エサウについてすべてのことを知っておられて、それでヤコブを選ばれていたのです。神が、私たちの信仰による応答を無視して、信じていない者、神の召しに応じない者を選んだり、逆に、信じて応答しているのに見捨てるといふことを行われていないのです。

私たちは、知りもしないことで、あれこれ議論していることが、あまりにも多いです。ここで改めて、へりくだる必要があります。だれが救われ、救われていないかということは、神の選びの主権の領域なのです。そこは、だれが良いことをして、悪いことをしたかという、私たちが思い計ることのできる代物では、全くないのです。それなのに、この人はこんなことをしていたから、地獄に行ったに違いないと論じ、この人はあれだけ良いことをしたから、天国に行ったはずだと論じています。こういふことは、予め知っておられる神以外には分かりようがないことなのです。

3B 主権者なる神

そもそも、「神に不正があるのでしょうか。」と思っている時点で、自分が正しく、神が正しくないとしているところで、神と人をあべこべにしています。これは絶対にあってはならないことです。パウロは、「決してそんなことはありません。」と 14 節で断じて否定しています。このようなあべこべを行った人物が創世記の初めに出てきますね。蛇です。エバに対して、神についてこう言いました。「創 3:5 それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」神は、善悪を知るることについて、ご自分のようになってほしくな

いから、敢えて目を開かせていないのだと、神が意地悪であるかのようにそそのかしました。

2A 主権による選び

そして、神はご自分の望まれるままに選ばれていること、その主権についてモーセとファラオを引き合いに出しています。「¹⁵ 神はモーセに言われました。「わたしはあわれもうと思う者をあわれみ、いつくしもうと思う者をいつくむ。」

1B 憐れみにおいて

主は、モーセを特別に愛しておられました。モーセのいろいろな願いをかなえておられますが、「あなたはわたしの心にかない、あなたを名指して選び出したのだから。」とされています(出33:17)。モーセが、エジプト人を殺してイスラエル人を救おうとしたけれども、それがファラオに知られて、彼はミディアン人のところに逃げてきました。羊飼いをして40年経った時に、「モーセ、モーセ(4:4)」と名指して選び出し、彼にご自身の名を現わしたのです。ここには、神がご自分がモーセを憐れもうとお決めになって、そうされているのであって、モーセが神の正しさにかなうことを行ったからではありません。

2B 頑なにすることにおいて

このような神の主権は、頑なにするとところにさえ及びます。「¹⁷ 聖書はファラオにこう言っています。「このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そして、わたしの名を全地に知らしめるためである。¹⁸」ですから、神は人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままに頑なにされるのです。」

神は、「ファラオの心を頑なにされた」という言葉が、出エジプト記に何度となくでてきます(例:10:27)。ここにおいては、大事なものは、ファラオがすでに心を強情にしたという言葉が何度となく出て来た後で、神が頑なにされたという言葉が出て来るのです。頑なにすると、元々、主を信じようとしているような人を、神が敢えて堅くするようにさえ聞こえますが、全く違います。そもそも、心を強情にしている人について、神がその頑なさを積極的に用いられて、災いを下されることによって、世界に、ご自分こそが主なる神であることを示すことにお決めになっていたのです。

私たちは、心を頑なにする人々の前に立つと、正直、たじろぎます。パウロも、コリントにおいて、多くの反対を受けましたが、夜に主が現れて、「恐れるな」と言われました。恐れていたのです。モーセも、ファラオのところに行ったら、彼がますます頑なになって、イスラエル人にさらなる労務を課して、苦しめたのを見て、「なぜ、あなたはそんなことをされるのですか？」と悩みました。しかし、主は、ご自分の計画をはっきりと伝えました。ファラオの頑なさによって、ご自分の栄光を現わすと。それで、モーセは、ファラオがどう反応しようとも、強情になっていても、そういった彼の反応ではなく、ただ主が命じられることを伝えることに徹したのです。人々の頑なさを見る時に、私たちは悲しみを覚えますが、けれども、主が何らかの御思いがあって、そのようにされているという神の主権

があることを覚えて、ただ、主の御名を伝えることに専念すべきですね。私たちが福音を宣べ伝えるのは、人々の反応に拠るのではなく、ただ主に命じられているからそうするのです。

3A 言い逆らう人々

しかし、主が望まれるままに憐れみ、また望まれるままに頑なにされる、ということを知ると、ならば、頑になることについて、どうしてその責任を問われるのか？と反発したくなります。それが、19 節です。「すると、あなたは私にこう言うでしょう。「それではなぜ、神はなお人を責められるのですか。だれが神の意図に逆らえるのですか。」」

今の時代、ますます、こうした神への挑発が強くなっています。神がみこころのままに行われていることがあり、そこには理由は問われません。問われる必要もないものです。例えば、男と女に神は造られました。女は男から造られて、夫婦では夫が頭になっています。それなのに、「男女平等に精神に反する。男尊女卑の神なのか？」と建てつきます。男と女が結ばれて一体になるのが結婚なのに、男と男、女と女の同性婚がなぜだめなのか？聖書の神は酷い！とします。けれども、私たちは、結婚とは男女の間のものであることは、どの文化でも、どの地域でも、理由もなく、そういうものであることを分かっています。ところが、自分たちの正しいと考えているものを突き付けて、そういった秩序に挑みかかるのです。

ましてや、神がある者に憐れみをかけ、またある者を頑なにするというみこころは、どう考えても受け入れがたいとみなすのです。憐れみを受けて、神を愛している人々がいれば、まったく反抗的で、神とキリストを度外視している人々もいることは事実であり、そのすべての背後に神が何らかの御心を持っておられることは確かなのです。そのまま、静かに神の前にいけばよいのです。

1B 理由を述べる義務もない主権者

このことについて、パウロは、「²⁰ 人よ。神に言い返すあなたは、いったい何者ですか。造られた者が造った者に「どうして私をこのように造ったのか」と言えるでしょうか。」と述べています。言い返していること自体が、甚だ神に対して失礼であるし、滑稽なほどの外れた、ということです。

このことを如実に表しているのは、ヨブ記です。私たちは、1 章と 2 章で、ヨブにふりかかった苦悩の舞台裏を見ることが許されています。神があまりにもヨブを誇っていたため、彼が神を恐れているのご存じだったので、サタンが挑みかかったことに受けて立ちました。つまり、サタンがヨブを苦しめるままにされ、いのちだけは触れないようにされたのです。

このことを知らずにヨブは苦しみます。そして、ヨブは自分に何ら、これらの災いを受けるに値する罪や悪を行っていないことを主張していきます。友人たちがあまりにも、罪を犯しているに違いないとするので、自分自身を正しいとしていきました。若者エリフが、「33:13 なぜ、あなたは神と言い争うのか。自分のことばに、神がいちいち答えてくださらないからといって。」と言いました。そし

て神ご自身が、わたしがこれこれのものを造ったとして、地の基から始め、わたしが、これらのものを造った時に、「あなたはどこにいたのか？」と問い詰めるのです(38:4 等)。そして、こう言われました。「40:2 非難する者が全能者と争おうとするのか。神を責める者は、それに答えよ。」そしてヨブは悔い改めます。「42:3 あなたは言われます。「知識もなしに摂理をおおい隠す者はだれか」と。確かに私は、自分の理解できないことを告げてしまいました。自分では知り得ない、あまりにも不思議なことを。」そして、神はヨブを元通り、いや二倍の慰めをもって祝福されますが、ついに、ヨブには舞台裏について明かされなかったのです！

そうです、神が造られた方であり、私たちは被造物にしかすぎず、主権者である神の前でひれ伏すことはありこそすれ、神から理由を聞き出す権利は何もないのです。

2B 神の気前良さ

よくよく考えれば、神が主権を持っておられることについて、その気前良さに、我々人間は腹を立てていると思います。主が恵みをもって人を選ばれている時に、どうしてですか、それは不公平ではないのですか？と言いたいくなります。

一日一デナリの労賃を与えた主人の喩えを思い出してください。日雇い労働者を、朝の 9 時から雇い、その後も 12 時頃と 3 時頃にも雇いました。5 時頃にも出て行き、一日中、何もしないで立っていた人々を、自分のぶどう園に連れて行き、一時間働かせたのです。6 時になってすべての労働を終わらせ、賃金を支払う時、5 時から働いた男たちから、一デナリをあげました。そして、9 時から働いた人たちは、もっともらえらと思つたら一デナリだけだったのです。それで文句を言ったのです。すると主人は、言いました。「マタ 20:13-15 友よ、私はあなたに不当なことはしていません。あなたは私と、一デナリで同意したではありませんか。14 あなたの分を取って帰りなさい。私はこの最後の人にも、あなたと同じだけ与えたいのです。15 自分のもので自分のしたいことをしてはいませんか。それとも、私が気前がいいので、あなたはねたんでいるのですか。」

主人は、一日中、突っ立っていた人々を見て、哀れに思ったのかもしれませんが。その憐れみから、初めに一デナリを与えたのです。そして、9 時から働いていた人たちにも喜んでおられて、一デナリ与えたのです。主は、その気前良さから、一見、不公平に見られるようなことを行われるのです。率先して、恵みを与えたいと思われているからです。

3B 陶器師の心

そして、パウロは、私たちを造られた神を陶器師として、神に造られた私たちを陶器としてたとえて、言い逆らう私たちがいかに、滑稽であるかを示しています。「²¹ 陶器師は同じ土のかたまりから、あるものは尊いことに用いる器に、別のものは普通の器に作る権利を持っていないのでしょうか。」陶器が、いきなり陶器師に向かって、「なぜこのように作るのか？」などと言いたいことはありません。同じように、陶器である私たちは、陶器師の手の中で、陶器師の意のままに形造られる

だけなのです。

1B 尊い器と普通の器

ここに出て来る尊いことに用いる器は、ここではモーセのような人々。普通の器とは、ファラオのような、いずれ神の裁きを受けるべき人々のことです。神は陶器師として、そのように作る権利を持っておられます。

2B ろくろの上の粘土

ところで、この陶器師の話は、預言者イザヤが語ったことですが、預言者エレミヤも陶器師について語りました。「18:3-4 私が陶器師の家を下って行くと、見よ、彼はろくろで仕事をしているところだった。4 陶器師が粘土で制作中の器は、彼の手で壊されたが、それは再び、陶器師自身の気に入るほかの器に作り替えられた。」これは、イスラエルの家の姿であり、彼らは神の手の中にあるとエレミヤは言っています。

つまりは、主は、私たちを、云わば人生や生活というろくろの上に、私たちを置いています。それらの状況を通して、私たちが神の御心にかなう姿に変えようとされています。御子の似姿に変えようとされているのです。ところが、その神の御手に逆らって、意地を張れば、それは、柔らかい土に堅いかたまりを持ってしまうことに他なりません。まだ、軟らかくなかったことに気づいた陶器師は、もう一度やりなおして、ろくろの上で、土をぺちゃんこにしてしまうのです。エルサレムから引き抜いて、バビロンに捕え移した神は、まさにそのことを行われました。私たちも、神の主権に明け渡さなければ、いつまでも同じところでやり直しをすることになるのです。

私たちがどうしても、ここだけは触らないでほしいと願っているところを、明け渡す時に、そこを陶器師なる主の手に任せる時に、主が望まれる作品となるのです。「エペ 2:10 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」神が、予め善い行いを備えられていて、私たちが主のみこころにゆだねることによって、神の願われている作品へと出来上がっていきます。

私たちは、分からずにその過程にいればもやもやします。しかし、徹底的に任せていきましょう。今の時代、本当に自分たちの思いを超えたところで、物事が起こって来ています。しかし、徹底的に神に任せていきましょう。神が、何かを行っておられるのだと信頼することこそが、私たちがロマ書で学んでいる、信仰による義です。